

忘れられない会話

★
一般部門
入選

【和歌山県・匿名】

れも吐き捨てるように…。

それでもMさんは「私は雨が好きな」と特別話し掛けるでもなく半ばひとり言のように話し始めた。霧囲気はとても優しくかった。

とても穏やかで、傷つき疲れ果てた私の心に黙って寄り添ってくれるようだった。とても短い会話だったけれど、なぜか心に残っていた。

あれから1年が過ぎようとしている。

今日も私は生きていて、やっぱり雨の日は好きにはなれないけれど、Mさんの言葉を思い出す。雨が降った日は「頑張らなくていい日。今日は心がお休みの日」と自分に言い聞かせながら生きている。

名前も顔もはつきり覚えていないけれど、もしもう一度、会えたなら「雨は好きじゃないけど、嫌いではなくまりました」。そして、「生きています。ありがとうございます」と言いたい。

「私、雨が好きな」

私が入院して何日目かの朝、看護師のMさんはそう言った。

「どうして？」と尋ねると、

「今日は休んでいいんだよ、頑張らなくていい日だよ、って言ってくれているみたいで。晴れの日の日差しは頑張れって言うてるみたいだけど。雨はなんかほつとする。もちろん仕事にはちゃんと来るんだけどね」と優しく笑って窓の外を見て、点滴の確認をすると、私のベッドから自然に離れていった。

なぜ私が入院したかという、簡単に言えば多量服薬と入水による自殺未遂で運ばれたからだ。

薬の影響もあつたが、ほとんど受け答えもしない私に他の看護師さんたちは腫れ物に触るような感じで事務的なこと以外は話さなかつた。

でもそれはそれでよかつた。生き残ったことで絶望感に満ちていたから。

それがどうしてMさんと話したのかよく覚えていない。たぶん、「雨、嫌やな」と私が言ったのだろう。そ